
プロジェクト **のれん及び減損**

項目 **第 102 回 ASAF 対応専門委員会及び第 444 回企業会計基準委員会で
聞かれた意見**

本資料の目的

1. 本資料は、第 102 回 ASAF 対応専門委員会（2020 年 10 月 21 日開催）及び第 444 回企業会計基準委員会（2020 年 10 月 22 日開催）において聞かれた主な意見をまとめたものである。

聞かれた意見（第 102 回 ASAF 対応専門委員会）

（意見聴取で聞かれた意見について）

2. 財務諸表利用者の意見は多岐にわたり、会計処理の議論に関連性の乏しい意見もあると思われるが、IASB ではそれらを幅広く受け入れようとする結果、却って議論が混乱しているように見える。会計基準設定主体としては、取り入れるべき意見を整理して対応していくべきであると考え。

（DP¹へのコメントの検討について）

3. のれんの減損の認識が遅すぎるとの課題が優先されることに違和感はないが、仮に償却の再導入が認められたとしても、開示が十分ではないという課題はなお残る。このため、開示の改善が不要であると捉えられないように表現に留意すべきである。改善にあたっては開示の内容と開示の場所に議論があることは理解するため、例えば、本プロジェクトと別に、IFRS 実務記述書第 1 号「経営者による説明」の改善で財務諸表利用者と財務諸表作成者が納得する枠組みを追求するなどの対応が考えられる。
4. 財務諸表の注記とすべきか否かの議論においては、IFRS として何を財務諸表に含めるか否かの境界の考え方が明確でない中で、先ずは注記とするという傾向が IASB にあるような印象がある。仮に注記とする場合、監査の観点では、その情報の検証可能性が重要となるが、検証可能性を担保できずに情報が流通することによって訴訟リスクを招くことを懸念する。

¹ IASB から本年 3 月に公表されたディスカッション・ペーパー「企業結合 — 開示、のれん及び減損」

聞かれた意見（第 444 回企業会計基準委員会）

（DP へのコメントの検討について）

5. 本プロジェクトの軸がぶれないようにすべきであり、IFRS 第 3 号「企業結合」の適用後レビューで特に優先度が高いとして指摘された課題（のれんの減損の認識が遅すぎるとの課題）の対応を重視すべきとのコメントの方向性に賛同する。一方で、企業結合に係る現行の開示も改善の余地はあるため、のれんの減損の認識が遅すぎるとの課題と別に、開示の改善に関して、関係者が折り合う水準を見出すための建設的な議論を進めていくことも重要であると考え。

以 上